教職員が一体となって取り組む道徳教育の推進

――「道徳教育充実のための連携推進サポートブック」の作成と活用を通して――

長期研修員　　髙田　康平

《研究の概要》

本研究は、「道徳教育充実のための連携推進サポートブック」（以下、「サポートブック」）の作成と活用を通して、教職員が一体となって取り組む道徳教育の実現を目指したものである。「サポートブック」を作成するに当たり、道徳教育の推進状況などについての調査を実施した。「サポートブック」は、事前調査から分かった道徳教育の課題解決に向けて、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めるための手立てについてまとめた内容となっている。研究協力校の教職員が「サポートブック」を活用し、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携に学校全体で取り組むことで、「サポートブック」の有効性を明らかにした。

キーワード　【道徳　教職員の連携　家庭や地域との連携　小中連携　サポートブック】

群馬県総合教育センター

分類記号：Ｇ１０－０１　令和３年度　２７６集

Ⅰ　主題設定の理由

「小学校及び中学校学習指導要領解説特別の教科　道徳編」（平成29年７月）では、校長の方針の下に、道徳教育の推進を主に担当する教師（以下、道徳教育推進教師）を中心に、全教師が協力して道徳教育を展開することが求められており、学校が一体となって道徳教育を進めるためには、「全教師が指導力を発揮し，協力して道徳教育を展開できる体制を整える必要がある」と示されている。特に、道徳教育の要である道徳科では、全教師が協力し合う指導体制を充実することが求められており、「全てを学級担任任せにするのではなく，特に効果的と考えられる場合は，道徳科における実際の指導において他の教師などの協力を得る」よう示されている。また、近隣の小学校と中学校が連携し、「互いに道徳科の授業参観をして学び合い，意見交換を行ったり，授業に参加したりする」よう示されており、小学校と中学校の接続を意識した取組を進めることが求められている。さらに、「道徳科の授業を公開したり，授業の実施や地域教材の開発や活用などに家庭や地域の人々，各分野の専門家等の積極的な参加や協力を得たりする」よう示されており、家庭や地域との共通理解を深め、相互の連携を図ることが求められている。第３期群馬県教育振興基本計画でも、その計画の中で、「人間としての生き方についての考えを深める道徳教育の充実」について挙げており、児童生徒の道徳性を高めるために、家庭や地域との連携を充実させることが求められている。加えて、令和３年度学校教育の指針では、 ICTを教育活動に取り入れ、 ICTを活用した授業改善や校務の情報化・効率化の推進に取り組むことが求められており、ICTを活用し、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めることが道徳教育充実のために重要であると言える。

研究協力校（以下、協力校）Ａ小学校は、平成30年度と令和元年度の２年間、校内研修で道徳科の授業改善に取り組んできた。協力校の道徳教育推進教師によると、昨年度は校内研修のテーマが道徳ではなくなったことで、道徳に関する研修の時間が限られてしまい、教職員の入れ替わりも多い中で、全教職員で共通理解の下、連携して道徳教育に取り組んでいくことに難しさを感じたとのことであった。また、新型コロナウィルス感染症対策の影響などもあり、家庭や地域との連携や小中連携を進めることが難しいということや、 ICTを活用した授業改善を今後の課題として挙げていた。

現在、群馬県をはじめ、各都道府県の教育委員会などでは、道徳教育の基本となる考え方や道徳科の授業づくり、道徳科の指導や評価などについての資料を発行し、教職員の道徳教育に関する理解や道徳科の授業の充実に取り組んでいる。そこで、これらの資料を基に、更に教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を学校全体で進め、教職員が一体となって道徳教育に取り組むことが道徳教育の一層の充実につながると考えた。

以上のことから、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進める手立てをまとめた「道徳教育充実のための連携推進サポートブック」の作成と活用を通して、教職員が一体となって取り組む道徳教育の実現を目指し、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

教職員が一体となって道徳教育に取り組むことができるよう、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めるための手立てをまとめた「道徳教育充実のための連携推進サポートブック」を作成し活用することの有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の内容

１　基本的な考え方

(1)　「教職員が一体となって取り組む道徳教育」とは

児童生徒の道徳性を養うために、教職員一人一人が自分の役割と責任を自覚し、協力し合い、支え合い、学び合いながら主体的に道徳教育を展開していくことを意味する。道徳教育推進教師が中

心となり、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めることで教職員の意識が高まり、一体となって道徳教育に取り組むことができると考える。

(2)　「教職員の連携」とは

学校の道徳教育の重点や推進すべき方向について全教職員が共通理解の下、道徳教育の充実に向けて、組織的に道徳教育に取り組むことである。教職員の連携を進めるには、道徳教育推進教師が中心となって、教職員が協力し合う指導体制の工夫や道徳科の授業を実施しやすい環境の整備、研修の充実などに努めることが重要であると考える。

(3)　「家庭や地域との連携」とは

学校における道徳教育の考え方やその取組について家庭や地域と共通理解の下、道徳教育の充実に向けて、学校と家庭、地域が相互に協力し合うことである。学校の道徳教育について積極的な情報発信や、道徳科の授業公開、授業への参加などを通して家庭や地域との連携が深まると考える。

(4)　「小中連携」とは

中学校区内の小学校と中学校の教職員が、道徳教育の充実に向けて、小学校と中学校の接続を意識し協力し合うことである。道徳教育に関する情報交換や相互の授業参観、合同研修会などを通して、児童生徒の実態や互いの実践について理解を図ることで、小学校と中学校の連携が深まると考える。

２　「サポートブック」作成に伴う実態調査の結果と考察

「サポートブック」の作成に当たり、校内における道徳教育の推進状況や道徳科の指導体制、家庭や地域との連携、小中連携について、現状や課題を把握するための調査を行った（表１）。

表１　実態調査の概要

調査対象	調査の主な内容
富岡市及び甘楽郡の道徳教育推進教師（小学校及び中学校）25名 令和３年度長期研修員の協力校の道徳教育推進教師（小学校及び中学校）13名	(1)道徳教育の推進状況 (2)道徳科の指導体制 (3)家庭や地域との連携を図る際の課題 (4)小中連携を図る際の課題

(1)　道徳教育の推進状況について

道徳教育の推進状況の調査結果（図１）から、「家庭や地域社会との連携に関すること」「道徳教育の研修の充実に関すること」以外の項目については、ほぼ80％以上が「よくできている」「できている」と回答していた。一方、「家庭や地域社会との連携に関すること」については71％が、「道徳教育の研修の充実に関すること」については53％が、「あまりできていない」「できていない」と回答していることから、この２点に課題があると言える。「道徳教育の研修の充実に関すること」については、自由記述欄に「ほかの研修があり道徳教育に関する研修の時間の確保が難しい」といった意見があり、道徳教育に関する研修を実施することが難しいということが分かった。そこで、「サポートブック」では、比較的容易に取り組むことができ、次年度以降も継続できるような手立てをまとめ、研修を

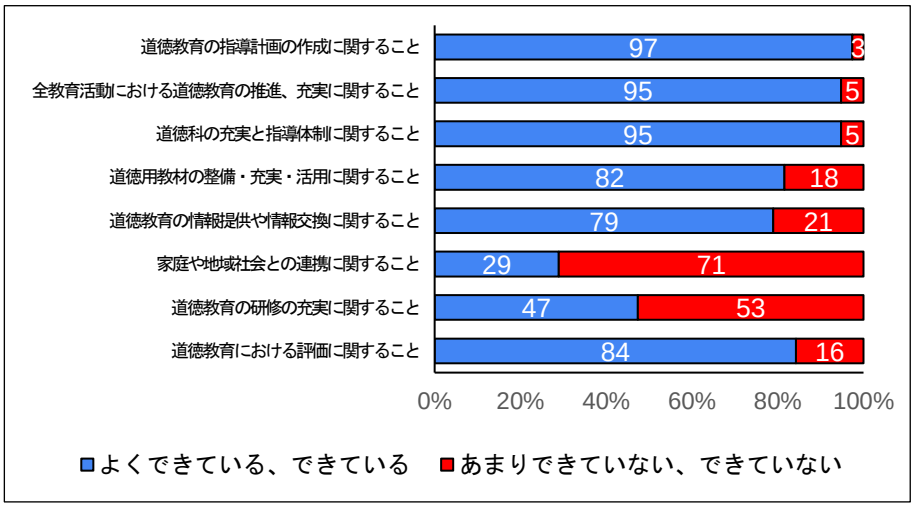


図１　道徳教育の推進状況の調査結果

行う時間がない中でも学校全体で取り組むことのできる内容について示していく。

(2)　「道徳科の指導体制」について

単学級のない学校の中で、ローテーション道徳やティーム・ティーチングを実施している学校は74％あり、指導体制を工夫して授業に取り組んでいる学校が多かった。一方、ローテーション道徳やティーム・ティーチングを実施していない学校にその理由を聞いたところ、「今までやっていなかったから」と回答した学校が67％、「時間割を組むことが難しいから」と回答した学校が26％あった。そこで「サポートブック」では、ローテーション道徳やティーム・ティーチングを実施していない学校にとって参考となるように指導体制の工夫について示すとともに、指導体制の工夫以外にも道徳教育の充実に向けて組織的に取り組むための工夫や方法を示し、学級担任任せの授業から教職員で協力して取り組む授業となるよう、教職員の連携についての内容を充実させていく。

(3)　「家庭や地域との連携を図る際の課題」について

家庭や地域との連携を図る際の課題として、「活用できる地域の人材や物的資源が分からない」との回答が55％、「授業に参加してもらう際の打合せが大変」との回答が50％あり、この２点が家庭や地域と連携を図る際に大きな課題となっていることが分かった。そこで、「サポートブック」では、これらの課題を解決するための工夫や方法について示し、道徳教育の推進状況で課題として挙がった家庭や地域との連携について改善できるようにしていく。

(4)　「小中連携を図る際の課題」について

新型コロナウィルス感染症対策の影響があったことも考えられるが、小中連携を実施した学校は８％と低い割合であり、道徳教育に関して小中連携を進めていくことが大きな課題となっていると言える。小中連携を図る際の課題として、「合同研修会を実施するための時間の確保が難しい」との回答が42％、「他の学校に授業参観に行く時間がない」との回答が45％あり、小中連携を図る際に時間の確保が課題となっていることが分かった。そこで、「サポートブック」では、この課題を解決するための工夫や方法について示し、小中連携が実施しやすくなるようにしていく。

３　「サポートブック」の作成方針と内容

(1)　作成方針

○　道徳教育推進教師が見通しをもって業務に当たることができるよう、道徳教育推進教師の役割や仕事内容について示す。

○　教職員が一体となって道徳教育に取り組むことができるよう、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めるための手立てについて示す。その際、教職員の負担が少なく、比較的容易に取り組むことができ、次年度以降も継続できる内容となるようにする。

○　文字だけにならないよう図や写真、イラストなどを入れたり、レイアウトを工夫したりすることで見やすくて、分かりやすいものにする。

○　教職員の連携では、道徳科の指導体制の工夫を示すなど、学級担任任せの授業から教職員で協力して取り組む授業となるよう、道徳教育の推進に組織的に取り組むための工夫や方法について示す。

○　家庭や地域との連携では、地域の人材を授業で活用するための工夫や方法について示すとともに、道徳科の授業を通して家庭と連携を図る方法についても示す。

○　小中連携では、中学校区内の小学校と中学校の連携について、相互の授業参観や合同研修会などを実施するための工夫について示す。

○　ICTの活用について取り入れ、家庭や地域との連携や小中連携を効率的に進めるための活用方法を示す。

(2)　内容

アンケート調査結果及び作成方針を踏まえ、以下のように「サポートブック」の内容を整理し章立てを行った（次ページ表２）。

表２　「サポートブック」の章立て

第Ⅰ章　道徳教育推進教師の役割	【コラム④　研修に動画を活用しよう】
1　道徳教育推進教師の役割	【コラム⑤　道徳教育パンフレットを活用しよう】
2　道徳教育の推進状況を確認しよう	8　道徳用教材を整理・保管・活用しよう
	9　道徳コーナーを作ろう
第Ⅱ章　教職員の連携	10　教職員向けに道徳通信を発行しよう
1　全体計画を活用しよう	
2　全体計画別葉を活用しよう	第Ⅲ章　家庭や地域との連携
3　年間指導計画を活用しよう	1　情報を発信しよう
【コラム①　指導計画について】	2　道徳科の授業を公開しよう
4　授業づくりの仕方や授業の進め方を共有しよう	3　授業を通して家庭と連携しよう
【コラム②　「はばたく群馬の指導プランⅡ」を活用しよう】	4　地域の人材を授業で活用しよう
5　評価の仕方や所見の書き方を共有しよう	【コラム⑥　「ぐんまの道徳」を活用しよう】
【コラム③　OPPシートを活用しよう】	【コラム⑦　出前講座を活用しよう】
6　協力して授業に取り組もう	第Ⅳ章　小中連携
(1)　ローテーション道徳	1　道徳科の授業を参観しよう
(2)　ティーム・ティーチング(TT)	2　合同研修会を実施しよう
(3)　ユニットの導入	3　合同研修会を実施するための工夫
7　OJTで学びの機会を作ろう	

４　研究構想図

Ⅳ　研究の計画と方法

１　実践の概要

協力校Ａ小学校の道徳教育推進教師と学年主任に「サポートブック」の説明と活用の依頼を行い、「サポートブック」を参考にしながら、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携に取り組んでもらった。教職員の連携、家庭や地域との連携については、道徳教育推進教師と学年主任で相談し、実践する内容を決めた上で学年ごとに実践を行った。小中連携については、協力校Ａ小学校と協力校Ｂ中学校の道徳教育推進教師で相談し、合同研修会の内容や実施時期などの計画を立てた上で実践を行った。また、一つの学年では、三つの連携を関連させて実践を行った。なお、実践では、協力校でこれまでにあまり取り組んでいない内容を扱ってもらい、すでに実践している部分や、実践しない部分については、道徳教育推進教師や学年主任に適宜内容の聞き取り調査を行いながら「サポートブック」の改良に努めた。また、小中連携における実践では、道徳教育推進教師の打合せや合同研修会に参加し、その様子を基に「サポートブック」の改良に努めた。

実践後は、道徳教育推進教師や学年主任、合同研修会の参加者に聞き取り及びアンケート調査を行い、「サポートブック」の有効性について検証した。

２　検証計画

検証の視点	方法
「サポートブック」は、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進める上で有効であったか。	・道徳教育推進教師、学年主任への聞き取り調査 ・合同研修会参加者への聞き取り及びアンケート調査 ・実践の観察
「サポートブック」を活用し、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めることは、教職員が一体となって道徳教育に取り組むことに有効であったか。	

３　実践

(1)　教職員の連携

①　ユニットの導入

第３学年と第４学年では、初任者をはじめ若手教員が多く、学びの深まりに課題を感じており、児童が考えを深めることができるよう、学年で協力して授業に取り組みたいと考えていた。そこで、学年で協力して授業づくりができ、一つのテーマについて児童が考えを深めることができることから、道徳科の授業にユニットを導入し、授業の充実に努めた。ユニットとは、複数の教材を組み合わせた単元のことである。

図２　ユニット作成に向けた話合い

まず、学年主任を中心に話合いを行い（図２）、児童の実態や学年の重点目標を踏まえて、ユニットのテーマと目標を設定した。次に、ユニットの目標に迫るために、道徳科の教材を組み合わせ、ユニットを作成した。第３学年では、家族に感謝の気持ちをもち、家族の一員としてできることについて考えることができるよう、ユニットのテーマを「あなたもすてきな家族の一人」とし、三つの教材を関連付けてユニットを作成した（表３）。

表３　ユニットの概要　第３学年

ユニットテーマ	あなたもすてきな家族の一人
ユニットの目標	いのちのつながりを知り、家族への感謝の気持ちをもちながら、家族の一員としてできることを進んでしようとする態度を育てる。

第1時	○主題名「いのちのつながり」　Ｄ－(18)生命の尊さ ○教材名「いのちのまつり」（出典：光文書院） ○ねらい　受け継がれ受け渡していく生命のつながりを自覚し、生命を大切にして生きて行こうとする心情を育てる。
第2時	○主題名「家族への思いやり」　Ｃ－(14)家族愛、家庭生活の充実 ○教材名「お母さん、かぜでねこむ―ちびまる子ちゃん―」（出典：光文書院） ○ねらい　家族に感謝し、家族のためにできることを進んでしようとする心情を育てる。
第3時	○主題名「すすんではたらく」　Ｃ－(13)勤労、公共の精神 ○教材名「はた・らく」（出典：光文書院） ○ねらい　周りのことを考えて働くよさが分かり、進んで働こうとする心情を育てる。

第４学年では、学年の重点目標が「相手のことを思いやり、誰に対しても親切にできる子どもを育てる」であることから、ユニットのテーマを「人を大切にするには」とし、人権月間と関連させてユニットを作成した（表４）。

表４　ユニットの概要　第４学年

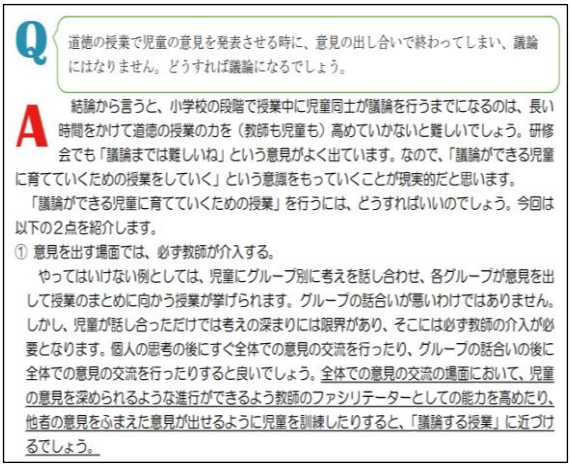
ユニットテーマ	人を大切にするには
ユニットの目標	相手の立場に立って考え、自分とは異なる意見も大切にし、誰に対しても思いやりの心をもって接しようとする態度を育てる。
第1時	○主題名「よい友だちになるために」　Ｂ－(９)友情、信頼 ○教材名「ブラジルからの転入生」（出典：光文書院） ○ねらい　友達のよさを見付け、友達と理解し合い、信頼関係を築いていこうとする心情を育てる。
第2時	○主題名「広い心をもって」　Ｂ－(10)相互理解、寛容 ○教材名「学級新聞作り」（出典：光文書院） ○ねらい　広い心をもち、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にしようとする心情を育てる。
第3時	○主題名「本当の思いやり」　Ｂ－(６)親切、思いやり ○教材名「せきが空いているのに」（出典：光文書院） ○ねらい　相手の気持ちや考えを思いやることの大切さが分かり、誰に対しても進んで親切にしようとする心情を育てる。

道徳科の授業にユニットを導入したことで、学年の教職員で協力して教材研究などに取り組み、指導の手立てなどについて共通認識をもって授業に取り組むことができた。また、一つのテーマについて、複数の教材を関連させたことで、児童は多面的・多角的に考えることができ、自分の考えを広げたり深めたりすることにつながった。

②　教職員に向けた道徳通信の発行

教職員の道徳教育への意識を高めるために、道徳教育推進教師が中心となり、各学年１名からなる道徳部で教職員向けに道徳通信の発行を行った。

まず、道徳部で道徳通信の内容について話合いを行った。話合いの結果、道徳通信の内容は、事前に教職員にどのような内容がよいかアンケート調査を行った上で決定することとなり、アンケート調査の結果、道徳科の授業に関する悩みや質問を募集し、道徳部で回答していくこととなった。道徳通信は道徳部で協力して作成し、３回発行した（図３）。道徳通信によって、道徳科の授業の悩みや疑問に対す


Q　道徳の授業で児童の意見を発表させる時に、意見の出し合いで終わってしまい、議論にはなりません。どうすれば議論になるでしょう。

A　結論から言うと、小学校の段階で授業中に児童同士が議論を行うまでになるのは、長い時間をかけて道徳の授業の力を（教師も児童も）高めていかないと難しいでしょう。研修会でも「議論までは難しいね」という意見がよく出ています。なので、「議論ができる児童に育てていくための授業をしていく」という意識をもっていくことが現実的だと思います。

「議論ができる児童に育てていくための授業」を行うには、どうすればいいのでしょう。今回は以下の2点を紹介します。

① 意見を出す場面では、必ず教師が介入する。

やってはいけない例としては、児童にグループ別に考えを話し合わせ、各グループが意見を出して授業のまとめに向かう授業が挙げられます。グループの話合いが悪いわけではありません。しかし、児童が話し合っただけでは考えの深まりには限界があり、そこには必ず教師の介入が必要となります。個人の思考の後にすぐ全体での意見の交流を行ったり、グループの話合いの後に全体での意見の交流を行ったりすると良いでしょう。全体での意見の交流の場面において、児童の意見を深められるような進行ができるよう教師のファシリテーターとしての能力を高めたり、他者の意見をふまえた意見が出せるように児童を訓練したりすると、「議論する授業」に近づけるでしょう。

図３　教職員に向けた道徳通信（一部）

る回答を全教職員で共有することができ、足並みを揃えた授業に向けて共通理解を図ることができた。

⑵　家庭や地域との連携

①　家庭との連携

第１学年では、主題名「きもちが　よい　いえのせいかつ」内容項目Ａ－（３）「節度、節制」ねらい「健康に気をつけ、物を大切にし、身の回りを整えわがままをしないで、規則正しい生活をしようとする」の授業で学んだことを、家庭での実践につなげることができるよう保護者に協力を依頼し、カードを活用して家庭との連携を図った（図４）。児童は授業の中で、規則正しい生活を送るために家庭で取り組みたいことを決め、カードに記入した。カードは家庭に持ち帰り、10日間の実践を行った。保護者には、児童の実践を認め、励ます声掛けを行うことや、カードへコメントを記入するなど協力してもらった。保護者の協力を得ることで、児童は前向きな気持ちで実践することができ、授業で学習したことを家庭につなげることができた。

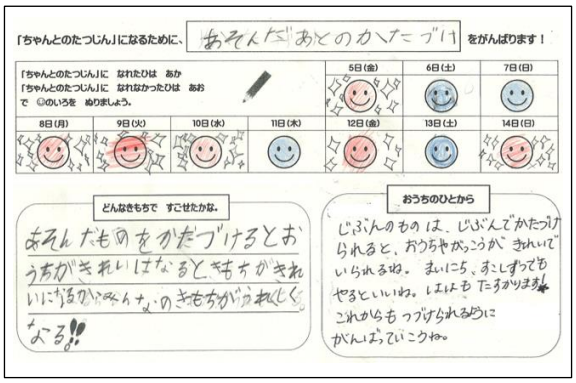


図４　活用したカード

第２学年、第３学年、第５学年では、保護者に事前のアンケートと事後のワークシートへのコメント記入を依頼することを通して、家庭との連携を図った。ここでは、第５学年の実践について取り上げる。

第５学年では、主題名「思いやりの心」内容項目Ｂ－（７）「親切、思いやり」ねらい「思いやりの心について理解し、だれに対しても思いやりをもって相手の立場に立って行動していこうとする」の授業において、アンケート作成ソフトを活用して「お子さんの思いやりのある行動を教えてください」という内容で、事前に保護者にWeb上でアンケートを実施した。アンケートをWeb上で行うことは初めてであったので、回答は任意としていたが、多くの家庭から回答を得ることができた（図５）。保護者アンケートの結果は、プレゼンテーションソフトでまとめたものをモニターに提示し、授業の終末で今までの自分を振り返る際に活用した。また、授業で使用したワークシートは家庭に持ち帰り、保護者にコメントを記入してもらった。保護者アンケートを活用することで、児童の授業への興味や関心を高めるとともに、自己を見つめ直し、今までの自分を振り返ることにつながった。

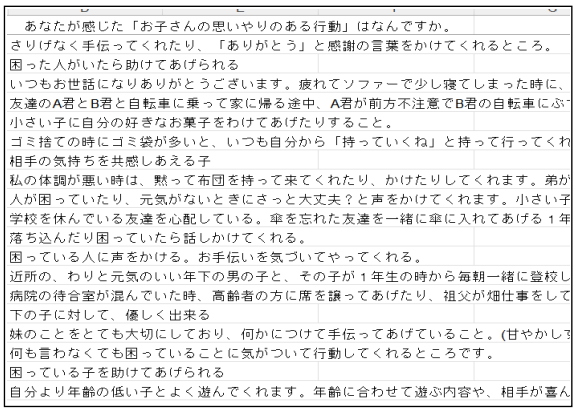

あなたが感じた「お子さんの思いやりのある行動」はなんですか。
さりげなく手伝ってくれたり、「ありがとう」と感謝の言葉をかけてくれるところ。
困った人がいたら助けてあげられる
いつもお世話になりありがとうございます。疲れてソファーで少し寝てしまった時に、
友達のA君とB君と自転車に乗って家に帰る途中、A君が前方不注意でB君の自転車にぶ
小さい子に自分の好きなお菓子をわけてあげたりすること。
ゴミ捨ての時にゴミ袋が多いと、いつも自分から「持っていくね」と持って行ってくれ
相手の気持ちを共感しあえる子
私の体調が悪い時は、黙って布団を持って来てくれたり、かけたりしてくれます。弟が
人が困っていたり、元気がないときにさっと大丈夫？と声をかけてくれます。小さい子
学校を休んでいる友達を心配している。傘を忘れた友達を一緒に傘に入れてあげる１年
落ち込んだり困っていたら話しかけてくれる。
困っている人に声をかける。お手伝いを気づいてやってくれる。
近所の、わりと元気のいい年下の男の子と、その子が１年生の時から毎朝一緒に登校し
病院の待合室が混んでいた時、高齢者の方に席を譲ってあげたり、祖父が畑仕事をして
下の子に対して、優しく出来る
妹のことをとても大切にしており、何かにつけて手伝ってあげていること。(甘やかしす
何も言わなくても困っていることに気がついて行動してくれるところです。
困っている子を助けてあげられる
自分より年齢の低い子とよく遊んでくれます。年齢に合わせて遊ぶ内容や、相手が喜ん

図５　保護者からの回答（一部）

第６学年では、主題名「温かい心」内容項目Ｂ－（７）「親切、思いやり」ねらい「親切な行為は困っている人を放っておけない心から生まれていることが分かり、自分も人に対して親切にしようとする」の授業において、道徳的価値に対する理解をより深めるために、児童に中心発問について、事前に家庭で保護者と一緒に考えさせた（図６）。事前に保護者と考えてきたことで、話合いの時間を普段よりも多く確保することができ、中心発問については、グループになって意見を出し合い、出た意見を分類したり、比較したりしながら話合いを進めることができた。これにより、普段の授業よりも、児童一人一人が主体的にじっくりと話し合う姿が見ら

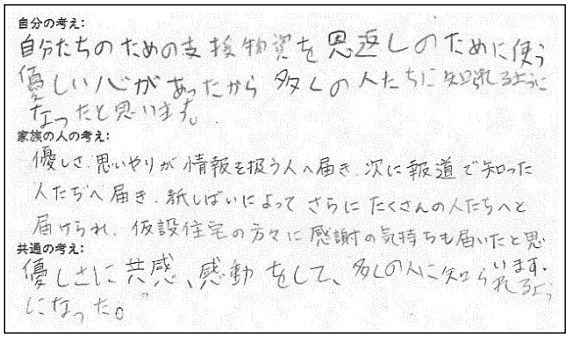


図６　保護者と取り組んだワークシート

れ、考えを深めることにつながった。

また、どの学年も授業後には、学校のWebページで授業の様子や児童の感想、保護者のコメントなどを紹介することで、家庭の道徳教育への興味や関心を高めることにつながった。

② 地域との連携

第６学年では、主題名「ボランティアの意義」内容項目Ｃ－(14)「勤労、公共の精神」ねらい「公共の役に立つことに意義や喜びを感じ、社会の一員としてできることを進んで行おうとする」の授業において、より児童がボランティアについて身近に感じることができるよう、インタビュー動画を活用して地域人材との連携を図った（図７）。授業で活用する地域人材を探すに当たり、まず、社会教育主事に相談した。社会教育主事からは「ボランティアに関することならば、社会福祉協議会に相談するとよい」とのアドバイスを受けたので、社会福祉協議会に相談したところ、「まちなかガイド」としてボランティアをしている方と、高齢者生活支援ボランティアをしている方に連絡を取っていただき紹介してもらった。また、授業のねらいや質問内容についても社会福祉協議会から地域ボランティアの方に伝えていただき、撮影の日程調整もしていただいた。インタビューでは、「どのようなボランティアをしているのか」「なぜボランティアを始めたのか」「ボランティアをしてよかったことは何か」について質問し、その様子を撮影した。事前に授業のねらいや質問内容を伝えておいたことで、撮影はスムーズに行うことができた。撮影した動画は、パソコンの動画編集ソフトで編集し、授業で活用した。インタビュー動画を活用したことで、児童は地域でボランティア活動をする方々の思いを聞くことができた。これにより、児童は教科書の内容を身近に感じることで、自分事として考えを深めることにつながった。また、関係機関と連携することで、地域の人材とつながることができた。

図７　インタビュー動画を活用した授業の様子

(3) 小中連携

道徳科の指導をより充実させるために、協力校Ａ小学校と協力校Ｂ中学校の道徳教育推進教師で、どのようにすれば合同研修会を実施できるか相談を重ねた。年度の途中であり、全員を対象にした合同研修会の実施は難しかったため、管理職と相談した上で、協力校Ａ小学校のメンターチームと協力校Ｂ中学校の若手教員とでメンター研修の一環として、授業研究会をオンラインで実施することとなった。オンライン授業研究会の概要は表５のとおりである。

表５　オンライン授業研究会の概要

対　　象	協力校Ａ小学校の教員11名、協力校Ｂ中学校の教員５名　合計16名
実践日時	令和３年10月26日（火）16:00～16:40
協議内容	道徳科の授業で対話的な学びを実現するために有効な手立てについて

オンライン授業研究会を実施するに当たり、学習支援ソフトを活用し、参加者への連絡やデータの共有を行えるようにした。また、協力校Ａ小学校で行われた道徳科の授業を撮影し、参加者が授業をいつでも視聴できるようした。さらに、授業研究会の班別協議がスムーズに進むよう、両校の道徳教育推進教師で参加者のグループ分けを行い、進行役を決めておいた。オンライン授業研究会の班別協議の際には、Web会議システムの少人数グループ分け機能を活用し、参加者を少人数のグループに分けて話合いを行った（図８）。その後、全体で班別協議で出た意見の共有を行った。少

図８　班別協議の様子

人数に分けたことで、話合いを効果的・効率的に進めることができ、参加者は小学校と中学校のつながりを意識することの大切さを実感することができた。

(4)　教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を関連させた実践

第３学年では、三つの連携を関連させて実践に取り組んだ。まず、５ページ表３のように道徳科の授業にユニットを導入し、教職員の連携と授業の充実を図った。そして、ユニットの第２時の授業、主題名「家族への思いやり」内容項目Ｃ－(14)「家族愛、家庭生活の充実」ねらい「家族に感謝し、家族のためにできることを進んでしようとする心情を育てる」において、「どのような思いで家事等を行っているのか」という内容で、保護者アンケートを行い、家庭と連携した。さらに、この授業の様子を撮影し、小学校のメンターチームと中学校の若手教員とのオンライン授業研究会で活用した。三つの連携を関連させたことで、道徳について学年で話し合う機会がより一層増え、互いに学び合いながら協力して道徳科の授業に取り組むことにつながった。

Ⅴ　研究の結果と考察

１　「サポートブック」は、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進める上で有効であったか。

(1)　教職員の連携

①　結果

教職員の連携に取り組んだ学年の学年主任と道徳教育推進教師に、「サポートブック」を活用して、教職員の連携に取り組んだ感想や意見について聞き取り調査を行った（表６）。

表６　教職員の連携について聞き取り調査のまとめ

・ユニットを導入したことで、学年の教職員で協力して授業に取り組むことができ、道徳について話す機会も増えた。 ・ユニットを導入することで、全体計画別葉や年間指導計画の活用も進み、教職員の道徳教育に対する意識が高まったと感じた。 ・道徳通信はすぐに役立つ内容であったので、大変参考になった。また、道徳通信がきっかけとなり、道徳科の授業についての対話が生まれた。 ・道徳通信は継続して発行してもらえると、教職員の意識が高まり、授業力の向上にもつながると思う。 ・道徳通信で、若手職員や今年度から来た職員に、本校のこれまでの実践や成果を伝えることができ、以前からいた職員もこれまでの成果を確認できるので、全校で足並みを揃えた指導につながると思う。 ・道徳通信の発行に向け、道徳部で協力して取り組んだことで、道徳部の意識が高まった。 ・カリキュラム・マネジメントの意識を高めることができるような内容にできると更によいと思う。

②　考察

ユニットの導入については、協力して授業に取り組むことでき、教職員の連携につながったという意見が出た。これは、ユニットを作成するために、ユニットのテーマや目標について学年でしっかりと話し合っただけではなく、ユニット内のそれぞれの授業についても、中心発問や展開を教職員で検討し、協力して教材研究に取り組んだからであると考えられる。また、全体計画別葉や年間指導計画の活用にも効果があったという意見が出た。これは、ユニットを作成するに当たり、各教科等における道徳教育に関わる指導の内容を確認したり、より指導の効果を高めることができるよう配列の見直しを行ったりしたからであると考えられる。これにより、全体計画別葉や年間指導計画をこれまでよりも意識して活用することができ、教育活動全体を通じて道徳教育を進めていこうとする意識を高めることにつながったと考えられる。

道徳通信の発行に関しては、教職員から好評であり、参考になったという意見が多く上がった。

また、道徳通信で教職員の共通理解を図ることができ、研修の代わりになったという意見から、研修を実施する時間がない中で、教職員の共通理解を図る手段として道徳通信は有効であったと考えられる。ほかにも、道徳部で協力して取り組んだことで、道徳部の意識が高まったという意見が出た。これは、道徳通信を発行するに当たり、道徳部で教職員がどのような内容を望んでいるのかアンケート調査を行ったり、執筆を協力して行ったりしたためであると考えられる。道徳通信は読む側だけでなく、作成する側の意識も高めることができたと言える。また、継続して発行すると、教職員の意識が高まるという意見や足並みを揃えた指導につながるという意見から、継続して発行することで、教職員の意識を高め、連携を進めることができると考えられる。

なお、ローテーション道徳といった指導体制の工夫や道徳用教材の整理・保管・活用など、「サポートブック」の内容で今回実践していない取組については、これまでに協力校Ａ小学校で実践してきており、教職員の連携を図る上で有効な手立てとなっていると言える。

以上のことから、「サポートブック」は教職員の連携を進める上で有効であったと考えられる。

(2)　家庭や地域との連携

①　結果

家庭や地域との連携に取り組んだ学年の学年主任に、「サポートブック」を活用して、家庭や地域との連携に取り組んだ感想や意見について聞き取り調査を行った（表７）。

表７　家庭や地域との連携について聞き取り調査のまとめ

・家庭へ実践の協力を依頼することで、授業での学びを家庭につなげることができた。保護者も前向きな声掛けをしてくださったようで、家庭と協力して取り組むことができた。
・保護者にアンケートの依頼をしたり、ワークシートにコメントをもらったりしたことで、家庭でも授業についての話題が出たという児童が多く、保護者の道徳への興味や関心が高まったと感じた。
・ワークシートへのコメントは、ワークシートに保護者からのコメント欄を設けるだけでよいので、教員の負担が少なく、実践しやすかった。
・中心発問について親子で考えることはこれまでやったことがなかったが、家庭との連携を図る上でよい取組であると感じた。保護者からも好評で、また子供と一緒に考えたいという意見やこれからも時々行ってほしいという意見をもらった。
・地域の人材を探す際に、社会教育主事や社会福祉協議会などの関係機関に相談することは、有効であると思った。社会教育主事や関係機関とも連携を深めていくことが大切であると感じた。
・地域の人材を道徳科の授業で活用することは、負担が大きくこれまでほとんどしてこなかったが、インタビュー動画を活用することで、地域の人材を授業で活用しやすくなった。
・インタビュー動画の活用以外にも、地域との連携を図る手立てがあるとよかった。また、物的資源の活用についても具体的な例やフローチャートなどがあるとよかった。

②　考察

家庭との連携を図るために実践した取組は、どれも保護者から好評であり、保護者の道徳への関心が高まったという意見が多かった。これは、道徳科の授業を通じて連携を図ることで、保護者が普段はあまり関わることのできない授業に間接的に関わることができ、授業の内容や子供の考えに以前よりも関心をもつようになったことが理由であると考えられる。さらに、授業後には、学校のWebページで授業の様子や児童の感想、保護者のコメントなどを紹介したことも、関心を高める上で効果があったと考えられる。

地域との連携では、社会福祉協議会などの関係機関に相談することが、地域の人材を探す際に有効であったという意見が出た。これは、地域の人材を探す際に関係機関に相談することで、関係機関が学校と地域の人材をつなぐ仲介役となり、学校だけでは探すことの難しい地域の人材とつながることができるからと考えられる。また、インタビュー動画の活用によって、地域の人材を授業で活用しやすくなったという意見が出た。これは、インタビュー動画を活用することで、ゲストティ

ーチャーとして直接授業に参加してもらうよりも、事前の打合せや日程の調整などお互いの負担を軽減できたことが肯定的な意見につながったと考えられる。加えて、直接授業に参加してもらう場合は、ゲストティーチャーの話す内容がねらいとずれてしまったり、話す時間が予定よりも長くなってしまったりするなどの心配があるが、インタビュー動画は事前に編集を行い、準備しておけるので、授業で活用しやすいと考えられる。

以上のことから、「サポートブック」は家庭や地域との連携を進める上で有効であったと考えられる。

(3) 小中連携

① 結果

協力校Ａ小学校とＢ中学校の道徳教育推進教師と授業研究会の参加者に、授業研究会の感想や意見について聞き取り及びアンケート調査を行った（表８）。

表８　合同研修会について聞き取り及びアンケート調査のまとめ

・オンラインで実施することで、どちらかの学校に集まる必要がなく効率的だった。 ・小学校の授業は、板書の仕方、中心発問までの流れ、保護者アンケートの活用など、中学校の道徳科の授業でも取り入れたいと思う手立てがたくさんあり、とても参考になった。 ・中学校の道徳科の授業の様子を聞くことができてよかった。どの教科でも、小学校と中学校のつながりを考えて授業を進めることは大切だと改めて感じた。小学校と中学校で連携していく必要性を感じた。 ・小中連携は大切であると分かっていてもなかなか連携はできなかったが、メンター研修を活用することで、授業研究会を実施することができたのでよかった。 ・オンラインでの実施は少し不安であったが、授業研究会をスムーズに進めることができたのでよかった。 ・学習支援ソフトを活用したことで、参加者への連絡を簡単に行うことができた。データも共有できるので授業動画をいつでも視聴することができてよかった。 ・授業動画やWeb会議システムを活用することで、道徳教育推進教師以外は１回も直接集まらずに授業研究会を実施することができた。 ・Web会議システムの少人数グループ分け機能を活用することで、オンラインでも少人数に分かれて班別協議ができてよかった。

② 考察

調査の結果から、授業研究会についてどれも肯定的な意見であった。これは、授業研究会を通して、普段なかなか話す機会のない小学校と中学校の教員で、道徳について様々な考えや意見を交流することができたからであると考えられる。また、小学校と中学校のつながりを考えて授業を進めることは大切だと改めて感じたという意見があるように、参加者は研修を通して、小中連携の大切さや必要性を実感できたと考えられる。今回は、メンターチームを中心とした一部の教員で授業研究会を実施したが、全教職員が参加する授業研究会が実施できれば、より連携が充実したものになると考えられる。

道徳教育推進教師からは、小中連携を図ることが難しい中で、授業研究会を実施することができてよかったという意見が出た。これは、メンターチームを中心に少人数で実施したことで、日程が調整しやすく、道徳教育推進教師の負担が軽減され、大きな規模で行うよりも比較的容易に実施することができたからと考えられる。加えて、オンラインで実施したことで、移動時間を省略することができたからと言える。オンラインでの実施については不安を感じていたようであるが、授業研究会をスムーズに進めることができ、研修を充実させることができた。これは、学習支援ソフトを活用する、授業動画を共有し視聴しておく、Web会議システムの少人数グループ分け機能を活用する、事前に班別協議の班分けと班の進行役を決めておくといった、オンラインで授業研究会を実施するための工夫が有効であったからと考えられる。

以上のことから、「サポートブック」は道徳教育推進教師が授業研究会を実施する上で役立ち、

小中連携を進める上で有効であったと考えられる。

２　「サポートブック」を活用し、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めることは、教職員が一体となって道徳教育に取り組むことに有効であったか。

(1)　結果

道徳教育推進教師と学年主任に、「サポートブック」を活用し、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めることで、教職員が一体となって道徳教育に取り組むことができたか、実践全体を通しての感想や意見について聞き取り調査を行った（表９）。

表９　一体となって道徳教育に取り組むことができたかなどについて聞き取り調査のまとめ

・実践する期間は短かったが、全校で協力して、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携に取り組んだことで、学校全体で道徳教育に取り組もうとする雰囲気ができてきた。さらに、道徳科の授業に学年で協力して取り組んだことで、授業改善につながり、授業の質が向上した。
・第３学年と第４学年でユニットの組み方やワークシートについて相談したり、職員室で道徳通信を基にして、教職員同士で授業について話し合ったりする姿が見られるなど、学年を超えて協力することができた。
・実践を通して、教職員の意識の高まりを感じた。今後も継続して連携に取り組むことが、教職員の道徳教育への意識を高める上で重要であると感じた。
・家庭や地域との連携を進めるために、協力して授業づくりに取り組むことができた。また、多くの学年で家庭との連携に取り組んでいたので、他の学年とも相談することができ、教職員の連携がより深まった。
・家庭との連携をユニットの中の授業の一つで行い、さらに、この授業を小・中合同の授業研究会で活用するなど、それぞれの連携を関連させたことで、学年の一体感が高まり、道徳教育への意識がより高まった。
・地域との連携はまだあまり進んでいないので、インタビュー動画を活用するなど継続して連携に取り組み、人材を開拓していくことが大切である。
・実践した期間が短いため、教職員が一体となるためにはもう少し長い時間が必要である。

(2)　考察

「サポートブック」を活用したことで、教職員が学年を超えて協力して道徳教育に取り組むことができたという意見や、学校全体で道徳教育に取り組もうとする雰囲気ができたという意見が多く上がった。これは、道徳教育推進教師が学年主任や道徳部と密に相談しながら、特定の学年だけでなく、学校全体で教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めたためと考えられる。学校全体でそれぞれの連携に取り組むことで、学年の枠を超えて、授業について相談するなど、学級担任任せの道徳ではなく、教職員同士で協力して道徳教育に取り組もうとする意識が高まったと考えられる。さらに、教職員で協力して道徳科の授業に取り組んだことで、授業の質を高めることができたと考えられる。

また、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を関連させて実践を行った学年からは、学年の一体感が高まり、道徳教育への意識がより高まったという意見が出た。今回は、一つの学年でしか、それぞれの連携を関連させた取組は行っていないが、各学年でそのような取組を実施することができれば、より学校全体で一体感をもって道徳教育に取り組むことができると考えられる。

以上のことから、「サポートブック」を活用し、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めたことで、教職員の道徳教育への意識が高まり、一体となって道徳教育に取り組むことにつながったと考えられる。また、「サポートブック」を活用する際には、道徳教育推進教師が学校全体を見通し、学年主任や道徳部と相談しながら、それぞれの連携を関連させ計画的に進めていくことが重要であると言える。

一方、地域との連携はあまり進んでいないため、継続して連携に取り組み、人材を開拓していく

ことが大切であるという意見や、実践した期間が短く、一体となるためにはもう少し時間が必要という意見もあり、それぞれの連携を更に継続して進めていく必要があると言える。

Ⅵ　研究のまとめ

１　成果

○　「サポートブック」を活用し、教職員との連携を進めたことで、学年の教職員で協力して授業に取り組むことができた。また、教職員の道徳教育への意識を高めることができた。

○　「サポートブック」を活用し、家庭との連携を進めたことで、保護者の道徳教育への関心を高めることができた。また、関係機関との連携やインタビュー動画の活用によって、地域と連携した授業を実施することができた。

○　「サポートブック」を活用したことで、道徳教育推進教師がメンター研修を利用した小学校と中学校のオンライン授業研究会を円滑に企画・運営することができた。

○　「サポートブック」を活用したことで、学校全体で道徳教育に取り組む雰囲気ができ、道徳教育推進教師を中心とした道徳教育の推進に役立った。また、道徳科の授業に教職員が協力して取り組んだことで、授業の質が向上した。

２　課題

○　カリキュラム・マネジメントを意識した全体計画別葉や年間指導計画の活用と地域の人材・物的資源の活用に関する具体的な実践内容を充実させる必要がある。

○　道徳教育を充実させるためには、ユニットの中に家庭や地域と連携した授業を取り入れ、小学校と中学校が合同でその授業の授業研究会を行うなど、学校全体で、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を関連させながら進めることが必要である。

○　教職員が一体となって道徳教育に取り組むためには、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携に継続して取り組んでいくことが必要である。

Ⅶ　提言

「サポートブック」を活用することで、教職員の連携、家庭や地域との連携、小中連携を進めることができる。そして、これらの連携を学校全体で継続して進めることで、教職員が一体となって取り組む道徳教育が実現できると考える。

＜参考文献＞

・文部科学省　『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳編』
・文部科学省　『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　特別の教科　道徳編』
・群馬県教育委員会　『第３期群馬県教育振興基本計画』（2019）
・群馬県教育委員会　『令和３年度 学校教育の指針』（2021）
・群馬県教育委員会　『はばたく群馬の指導プランⅡ』（2019）
・群馬県教育委員会　『はじめよう！道徳科』（2018）
・群馬県教育委員会　『ふかめよう！道徳科』（2019）
・群馬県教育委員会　『ふかめよう！道徳科　実践編』（2020）
・内田　淳　『教師が協働的に道徳科に取り組むためのカリキュラム・マネジメントについてーユニットを導入した年間指導計画の作成を通してー』　群馬県総合教育センター(2021)

＜担当指導主事＞

小倉　久代　　豊岡　大画